

会 議 記 録 (概要)

会 議 名	令和2年 第7回三田市文化ビジョン検討委員会
日 時	令和3年1月13日(火) 10時00分から12時05分
場 所	三田市役所本庁舎3階302A会議室
出 席 者	田辺委員長、木村副委員長、阪本委員、小中委員、門垣委員、山口委員、林委員、柳井委員 (8名/11名)
事務局等	矢萩広報・交流政策監 西田地域創生部長 印藤同部市民協働室長 (以下、部・室名を省略) 横溝文化スポーツ課長、畑同課副課長、山崎同課課長補佐、 森鼻同課係長 (コンサルティング業者) (株)地域社会研究所 酒井
傍 聴 者	9人(定員8人に付き委員長の許可による)
添付資料	レジュメ、資料16、同別紙

1 開会 (進行：文化スポーツ課長)

矢萩 広報・交流政策監 挨拶

1月10日に成人式を開催した。万全の新型コロナ感染症対策下で2部制にするなど、例年と比べるとコンパクトな開催であったが、厳かで力強いものになった。コロナ禍で強いられる部分もある反面、原点に立ち返って、祝う気持ち、感謝の気持ちに溢れた心に残る成人式であったと思う。この成人式を開催したのが、正に本日のテーマにもある郷の音ホールで、参加した新成人の心には、郷の音ホールがふるさとのランドマークとして刻まれたと確信している。

郷の音ホールは、音響・舞台設備が充実した素晴らしいホールであるが、開館から14年が経ち、それなりの維持経費がかかるのは致し方ない。多くの市民の思い出の場でもある郷の音ホールが、引き続き人々の心のよりどころであり続ける使い方ができるよう、市民の皆さんと一緒に考えていきたい。

2 報告事項

(1) 会議の成立 過半数出席につき成立

(2) 傍聴報告 9人

3 協議事項 「郷の音ホールの役割」【資料16】及び別紙1～5

委員長 矢萩広報・交流政策監のご挨拶にあった成人式の日、隣の施設で三田市生涯学習

サポートクラブの講義が予定されていたが、積雪の影響で延期になった、悲喜こもごもである。当検討委員会も新型コロナウイルスの影響でスケジュール変更をしながら、昨年は、なんとか予定通り協議を進めることができた。これからも皆様のご協力をお願いする。

<事務局から資料 16 及び別紙について説明>

- ・ 施設（設備）の経年劣化
- ・ 財源（基金）の枯渇
- ・ 郷の音ホールの自立性
- ・ 市内外圏域における郷の音ホールの位置付けと役割 他

委員 事務局の説明では郷の音ホールの機能について協議するということであるが、これまでの委員会協議の中でも指定管理者制度や、文化芸術全般の仕組みのあり方などについて意見が出されていた。まずは郷の音ホールの機能がどうあるべきかを決定してから、大枠の仕組みを決めていく流れで進めるのか。

事務局 事務局説明に捉われず、経営の形態等についても闊達にご意見をいただきたい。

委員長 原則的なことから具体的なソフト、ハード面まで、広く協議を進めることとする。

委員 施設の経年劣化については、市が修繕で対応していくとのことだが、設備の技術革新に対応していくためには、相当の費用がかかると思う。近隣市町の施設でも同じような問題を抱えていると思われるので、財政的な面も含めて意見交換ができればと思う。

委員長 近隣他市町でも同様の課題を抱えていると思うので、どのように対応されているのかを、別紙 2 の補足として、事務局から各市町に問い合わせただければと思う。

委員 財政的には人件費が一番大きいと思うので、それぞれの施設におけるスタッフの人数も調べていただきたい。

委員 運営形態については、指定管理や直営など、施設により異なるので、あわせて知らせて欲しい。人件費も運営形態によって変わってくるのではないかな。

委員長 今回出された要望についてはかなり情報量が増えると思うが、別紙 2 にあがっている全ての施設について必要か。

委員 郷の音ホールが今後どうあるべきかを協議するのが目的なので、そこまで詳しい他市町の情報は不要だと思う。市民の文化活動について、児童や高齢者世代は活発に活動しており、郷の音ホールも利用しているが、若者や働いている現役世代が参加しづらいという問題がある。一方で市民センターは比較的気軽に利用されているようなので、若者など現役世代が、市民センターと同じように郷の音ホールを気軽に使える仕組みをつくりたい。そのためどのようなインフラを整備するかなどを検討し、結果として成し得る仕組みを考えていけば良いのではないかな。郷の音ホールは、市民センターより多くの人が集まる拠点としての機能を有するので、この機能を充実するための協議に必要な情報をいただければと思っている。

委員長 事務局には、三田市と特に関係があるようなホールについて、人件費等について調べていただきたい。資料別紙 2 にある神戸市の開館予定の 2 施設は記載不要ではないかな。

芦屋市のルナホールを追加すれば良いと思う。右ページ地図の施設位置を示す点周辺の円の大きさは規模をあらわすものではないとのことなので、消去して良いと思う。地域的な比較調査と同時に、時間的な経費の検討もすべきということである。関連するが、郷の音ホールの事業のコンパクト化に伴う、海外招致の取り止めにより、平成28年度から30年度にかけて、事業支出が減ったことが、資料別紙1のグラフに如実に表れている。これと、資料別紙5にあるアンケート結果、「郷の音ホールを利用したことがない」理由に対する、「魅力的な公演が少ない」という意見との関連をどう捉えるか。費用がかかる事業を削減すれば、自ずと経費も減るが、魅力的な文化事業にはお金がかかるということも踏まえると、経費削減だけに注目するのは、危険な面もあるのではないか。事業のコンパクト化を行った前後で、魅力的な公演がある・ない、の割合を比較する調査結果はあるか。

事務局 平成30年度に事業をコンパクト化したことによって事業経費は下がっているが、アンケートと事業との関係性は分析できていない。アンケート実施は令和2年1月なので、前年度のコンパクト化で経費を抑えた結果として、魅力的な公演が少なくなった、ということであれば、見直していかなければならない。毎年度、事業ごとのアンケートも実施しているので比較調査する。

委員 アンケートでの「魅力的な公演がない」の意見については、海外招致を止めたことだけでなく、市民活動団体が行う公演などが、毎年同じような内容の繰り返しになってしまっていて、「ぜひ観たい」という関心につながらない、ということも反映されているのではないかと思う。活動団体も、観客側の市民目線を意識して発表する必要がある。

委員長 資料16の(1)「ホールの市場性の問題」もあると思う。市民の文化芸術活動を、当事者以外がどう評価しているか、需要がどのくらいあるのかを、これからは考えていかなければならない。

委員 その目安として、資料別紙3の鑑賞事業について、それぞれに集客率(座席に対する割合)がわかれば、事業の魅力の指標になるのではないか。公演内容はすごく良かったのに、空席が多かった、というお話を聞くこともあるので、集客率の結果を分析すれば、市民が望む公演がどのようなものであるかの傾向が見えてくる。

委員長 鑑賞、創造、普及・育成などの事業枠での大きな傾向として、集客の状況はわかるか。

事務局 それぞれの事業の公演ごとに定員数や来客数の資料はあるが、分野別に集計はしていない。

委員 先ほど、市民活動がマンネリ化して来客数が伸びないという意見があったので、人が集まる公演を対象とした事業だけの集客率だけ示してもらえば良い。

事務局 郷の音ホールの運営評価委員会で委員の皆さんにモニタリングをお願いしており、その結果として、良いプログラムだが、座席が半数しか埋まっていなかったという報告もいただいている。

委員長 その報告について、何が大きな要因と考えているか。

事務局 資料別紙3の文化振興事業一覧に示している事業は、市内で広く様々なジャンルを鑑賞してもらおうという発想で組み立てられている。近隣ホールとの関係性を考えると、

多くのジャンルを単に羅列して、好きに選んでくださいという方法が市民の皆さんのニーズに合っていないのではないかと。個々の事業で、良い内容の公演を行えば当然、観客は増えるのだが、もっと大規模の、例えば海外の交響楽団を招致するとなれば、施設規模や立地により、自ずと都心の施設に限定され、これを市民が鑑賞するためには、市外に移動しなければならない。そういう近隣市町との関連性が、現状の事業計画では考慮されていないのではないかと。施設の持続可能性を考える上で、今後は近隣との広域的な関係の中で、事業費を集中して投入する方法に見直していく必要があると考えている。

委員 質が高いとされる事業、イコール人気が高いのか、という疑問を感じている。集客力があるコンサート等は、必ずしも質が高いとは限らないと思う。今の事務局の説明には、事業の方法が市民ニーズに応えることができていないのではないかと。あったが、このニーズとは何か。演歌歌手やテレビ出演が多い人など、有名人の演目は、一般的にニーズが高いと評価される傾向がある。こういった演目に注力することが郷の音ホールの目的ではなく、質が高いとされる演目をホールで行い、文化芸術に対する市民の意識を育てていくという視点が必要だと思っている。

委員 鑑賞事業には「みる」に対する考え方はあるが、「育てる」の視点も必要である。ホールは事業体であるので、どの部分を事業として成り立たせて、それ以外の教育活動やコミュニティ活動をどう展開していくのかを、ある程度、切り分ける必要があるのではないかと。郷の音ホールの商圈や何を得意とするのか、をしっかりと見据えた上で、近隣のホールとの役割分担も考え、極論かも知れないが、有名な海外のオーケストラ等は招致しないという結論に至るのであれば、その分費用を抑えて、施設維持に投じていくことに焦点を置くべきである。

副委員長 過日の検討委員会で、文化芸術活動には必要な公的資金を投じるべき、と申しあげたが、厳しい財政状況の中なので、できるところでは節約することも必要である。近隣ホールとの連携、役割分担も手法の一つで、県では、例えば、複数の県で、一つの同じ事業を協働して持ち回りで実施することで、その分費用を安く済ませたり、県内でオペラを上演する場合に、芸術文化センター以外の他地域の施設の規模では、そのままの形では開催できないので、芸術監督と相談して、ダイジェスト版にするなどの工夫をしている。そうすれば、スタッフの人数も舞台費用なども少なくて済むので、三田市でも周辺地域の施設と連携して効率的な事業展開してはどうか。

委員 同じ考えをもっている。今は、三田のまちの中で完結してしまっている。先ほどの資料説明にあった事業の削減の中で、私の知るところでは、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のチェロの公演がなくなった。郷の音ホールが頑張っていた事業というイメージを持っていたが、三田市の音楽活動の発表の場は、郷の音ホールだけではない。市民センターや市庁舎コンサート、学校のコンサートなどの市民活動の場があり、その集大成として郷の音ホールでの発表があって良いのだが、それらをまとめるのは、行政と郷の音ホールの連携なのではないかと。実際には指定管理者に任せることになるのかも知れないが、経費の問題に注力すると、どうしても節約だけの話で萎縮してしまうので、事業をより良い方向に拡大できる議論を進めたい。

委員長 海外のオーケストラを招致する場合は、県内ホールや国内のいくつかの施設で連携して実施されているが、郷の音ホールでは、どこの海外オーケストラを招致されたのか。

事務局 郷の音ホールは、開館当時から指定管理施設であり、受託した民間企業のノウハウで、同種の指定管理施設を巡回する形で海外公演が実施できていた。過去に何度かベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の選抜メンバーを招致している。

委員長 フルオーケストラが来たことはないというのは、中途半端ではある。海外では、よくシーズンオフにグループを組んでアルバイトで演奏しに来ているが、音楽をよく知っている人は鑑賞しに行かない。三田市と同じくらいの規模のヨーロッパのまちなら、超一流でなくても、必ずオーケストラ楽団を持っており、神戸の松方ホールでは他のホールと連携しながらそういう楽団を招致している。そう考えるとアンケート調査の結果で、魅力的な演目がないというのも理解できる。演目の内容はどこで決めているのか。

事務局 業務基準書をもとに指定管理者に任せている。細かな内容までは調整できていない。

委員長 これまでの委員会では、三田市の文化事業をどうするかについて、指定管理者から出された事業提案をチェックする機能が必要ではないか、という意見が何度か出された。この点は文化ビジョンにも、反映する必要がある。

副委員長 指定管理者に任せっきりになると、三田市の個性や独自性が発揮しにくい。指定管理者制度はビジネスの要素を含むので、効率的にすすめることの優先順位は高くなる。三田市の行政が上手く関わることで、文化行政とより合致する郷の音ホールの運営に変えていくことができるのではないかと。市の文化行政セクションと館長、文化協会の長など、文化芸術活動に長けた方々が集まって民間活力を活用しながら検討する仕組みにしなければならない。県の芸術文化センターでは芸術監督の佐渡裕氏、マネジメントに朝日放送におられた林伸光氏、県行政から派遣の副館長や事務局長が、同じ方向を向いて三位一体で運営している。事務局長は県の本庁部長級にあたるので県の財政部局との予算折衝にも臆せず対応できる。結果として90パーセント越えの使用率を実現できているのだと思う。郷の音ホールも前向きに運営されている良い施設だと常日頃から思っているが、もっと三田市の文化行政と密に連携した方が、より市民のみなさんにも喜んでいただけるホールになるのではないかと。

委員 指定管理者が企画するプログラムについて、文化施策を担う市と意見交換しながら内容を詰めていく機会が少ない。ほぼ指定管理者に任せてしまっている現状に問題があるのではないかと。指定管理者からも、市の誰と相談すれば良いのかわからないという話を聞いている。

委員長 意見交換の場の必要性については、これまでの委員会でも何度か提案されているので、市でも具体的に考えていただければと思う。資料別紙5のアンケート結果で、郷の音ホールを利用したことがない理由の中で、特に注目したいのは、「魅力的なイベントがない」と「どのような公演があるのかわからない」の回答だが、これらについては、過去に広報・交流政策監から、市が中心になって情報発信の手法等について考える、という具体的なご発言があったので、解決に向かうと思われる。「文化芸術活動に関心がない」とい

う回答については、難しいが、郷の音ホールの運営の中で、全ての市民の関心を高めるということを意識しての継続が大切だと思う。チケット代、使用料についての回答は、3%程度なので、大きな問題ではないと考える。

委員 (イベントに) 魅力がない、ということには同意見である。以前市外に住んでいたが、興味のあるイベントがあれば、大阪、神戸にもすぐ行けた。三田市からは距離もあるため、関心が薄まっている。自分が子どもの頃は、音楽芸術の公演がある場合、学校にチラシなどが配られ児童・生徒が聴きに行ったが、最近では、そういう取組みがないように思う。子育てなどで忙しく、近くにホールもない場合は、なおさら芸術文化活動に対する興味を失いがちだが、市民の意識を育てるという観点からも、郷の音ホールは近隣市町と積極的に協力して魅力的な公演を実施してほしい。

委員長 郷の音ホールを始めとする文化芸術活動のPRを学校にはどの程度働きかけているのか。

事務局 学校へはアウトリーチ事業として、演奏等に行くことはあるが、郷の音ホールのコンサート等の情報提供はしていない。基本は広報誌や市のホームページでのお知らせと、“友の会”会員への情報が中心である。市民向けには定期的にパンフレットを新聞折り込みで情報提供している。以前は、学校へのPRをしていたが、これから行うとすると、学校との調整が必要だと思っている。学校では、教育行政、PTAで配布する資料等、外部からの多くのお知らせを扱っているので、これらに追加するための調整が難しい点もある。

委員長 文化芸術面での学校教育との連動は必要だと思うので、学校でできない理由は解決して、みんなで協力するべきである。学校でのPRについて考えていただきたい。

委員 市民団体主催のイベントで、教育委員会の後援をもらうと、幼稚園、小中学校までは学校経由で案内を送ってくれるが、高校は所管が県なので別の方法で案内する必要がある。先生方も忙しく、学校へのアプローチは難しいので、校長先生の考えで決まるのではないか。

委員長 本来、学校というのは最も文化的な場だと思うので、ぜひ進めていただきたい。

委員 ここ数年、郷の音ホール主催で、フルートの活動グループと新大阪にあるフルートメーカーとが協力して体験教室を実施しており、毎年50人の募集案内を郷の音ホールから、市内の小中学校に配布していただいている。2か月間で5回ワークショップをしているが、申し込み開始から、1時間以内に定員に達してしまう。文化芸術活動に関心がない人が大多数でありながら、興味さえあれば参加したい人は一定数いると思われる。郷の音ホールで実施しているプログラムの情報が、もっと教育の現場に浸透すれば、反応は返ってくるのではないか。

委員長 今までなかった組織やネットワークを作るという意味では、小中学校の育友会の連合会に後援団体になってもらえれば、育友会が後援するイベントであれば、学校は必ず協力する。人と人とのネットワークが大切であり、市内の文化団体間で情報共有できていないとすると、過去の委員会で何度も提案されているように、情報共有の場や組織を作る必要がある。また、三田市内には優れた芸術家が複数住んでおられるが、そのリストがないという問題も指摘してきた。県内では朝来市和田山のジュピターホールや、西脇市のア

ピカホールなどは、個人的な繋がりを活用して、良い取組みができています。西脇市は、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の知り合いがおり、何人かのメンバーがビジネス抜きで来日して、学校にも行ってくれている。郷の音ホールはそういう人材を知っている必要があり、三田市は市内の人脈をリスト化すべきである。

副委員長 三田市にも豊かな人的ネットワークはあると思うので、それらを掘り起こし連携すれば、三田市の文化はより活発化すると思う。

委員 人的ネットワークがうまく機能する仕組みがあれば、音楽に限らずプロの人たちは学校に赴いての活動に協力してくれると思う。

委員長 先ほど、子育てに忙しい人たちは、イベントに参加することが難しい、という意見があったが、郷の音ホールのコンサートなどで、観客のお子さんの保育は行っているか。あるいは、親子で参加できるファミリーコンサートは実施しているか。

事務局 個々のコンサートでは、保育をしていることはあると思う。また、ファミリーコンサートは行われている。

委員長 日本では何歳未満はご遠慮ください、というアナウンスを聞くことがあるが、ニュージーランドでは、どんな行事でも、子どもを保育する環境ができています。例えば、湊川短期大学に保育に関する学科があればタイアップできないか。責任者は必要だが、学生の実習にも役立つ。これも人的ネットワークである。

委員 0歳児からのコンサートは国内でもある。質の高いものを、質の高い環境の中で観るというのも必要であるが、鑑賞者を増やす取り組みもしていかなければならない。資料別紙1にあるように、事業支出が減ると黒字になっているように見えるが、同時に事業収入が減っているということは、規模が縮小していると言える。事業を充実するためには鑑賞者を増やすことが必須であり、現役世代と市外地域からの参加を促すことが重要になってくる。そのために、どのような方法が郷の音ホールに合っているかを考えていく必要がある。

委員 丹波篠山市などの隣接市町と広域で連携することが必要である。大阪まで行かなくても三田市の郷の音ホールで、良い演奏が聴けるということに意味があるのでないか。現時点で、市外からどれだけの人が来館しているのかを確認する必要がある。

委員 鑑賞者を増やすのはチラシ、ホームページでの呼びかけだけでは効果が見込めず、コアなファンがいないと難しいと思われる。三田市内だけではコアなファンを大量に生み出せないなので、近隣ホールと連携して、例えばホールを巡るスタンプラリーのコンサート版などを行うことで、コアなファンを増やし、鑑賞者の枠を拡げることが必要である。

委員長 近隣施設との連携は、今あげられた例のようにスタンプラリーなどで協力する面と、他のホールができない特長を発信して差別化を図る競争面の両方の関係が必要である。近隣市町向けに情報発信する以前に、三田市民がコンサート等のイベント情報を知らないという課題もあるので、これまで行っていなかったSNSでの情報発信の取組みと、そのための若い世代のスタッフの確保が必要と考える。

副委員長 郷の音ホールの周辺地域の人たちにも応援団になってほしい。地域の人にとっても郷の音ホールはブランド価値がある素晴らしい存在だと思う。県の芸術文化協会の諸

施設では近隣の商店街などが応援団になっている。県立美術館では周辺の復興住宅の人たちもサポーターになって、老人福祉センターなどに事業（展覧会など）の声掛けしてくれている。地域の人たちはチラシの配布やポスター設置にも協力的で、自分たちの美術館だという意識が広がりつつある。西宮市の芸術文化センターでは野外公演の無料開催や、商店街からくじ引きの景品提供を受けるなど、互いに良好な関係が築けている。郷の音ホールでも周辺地域を巻き込むことで、ホールを一緒になって盛り上げていこうという機運が一層高まるのではないかと。

委員 資料別紙5にある団体アンケート結果の「あなたの団体の発表場所」の円グラフに見られるように、郷の音ホールの57.1%に対して、市民センターのシェアが一定数ある。郷の音ホールの役割を考えていく上で、格が高い芸術文化活動の拠点だという市民意識は共通していると思うので、郷の音ホールでの公演発表が、ステップアップの最終形であるという位置づけを明確にするべき。活動団体は、各地域の市民センターで学んだり、発表したりを年中繰り返しているもので、成果を披露したいというニーズは少なからず持っている。その集大成として、郷の音ホールでもっと気軽に発表できるような仕組みをつくり、施設や市から情報提供すれば、現在60%の稼働率を上げることもつながるのではないかと。

委員 学生時代に吹奏楽をしていたが、有名な演奏者が利用するシンフォニーホールで演奏できるのは、すごいことだという話を学校の先生から聞かされ、毎年コンサートを目標にして頑張っていた。郷の音ホールでも、学校の定期演奏会を実施できるようPRし、教諭と連携していけば、施設のファンを増やすことができるのではないかと。

委員長 郷の音ホールで学生の割引はあるのか。

事務局 郷の音ホールに学割はない。定期演奏会を郷の音ホールで開催されている学校は多いが、関係者以外への宣伝はあまり行われていない。

委員長 学校の演奏会には、保護者等を中心にある程度の人数が集まるので、市場拡大の1つの方法である。先ほど県の例として挙げられた周辺地域のサポーターは、郷の音ホールの立地では少し難しい。ただし、近くには県立有馬高等学校があるので、サポートしてもらえよう交渉してはどうか。順次他の高等学校に広げていくこともできる。他の施設がない郷の音ホールの近隣団体と言えばJ A（パスカル）がある。以前は、労音、民音などで協力してコンサートも開催していた。三田の農産物には良いものがあるので、イベント終了後、野菜を販売するなどの協働も検討できるのではないかと。

委員 ホール主催で、企業とのタイアップなどはあまり聞かない。

委員長 一昨年、ビール検定では三菱電機が、組合を通して協力してくれ、職員対象に事前研修会も行った。県の芸術文化センターが採用しているネーミングライツも可能かもしれない。宝塚のベガホールでは10年ほど前から、神戸女学院音楽部のコンサートを始め、卒業生、後輩、保護者が来られるので続いている。三田市での学校との連携がこれからの課題であれば、大きな可能性があると思っている。

委員 アンケート結果から、イベントがあまり知られていないという点については、ポスターを多くの場所に貼る意義は大きいと考え、協力してくれる店舗の登録制度などがあれば良いのではないかと。学校主催のコンサートでも、出演する学生自らが、ポスターを持って

店舗にお願いに行くと思う。地道かも知れないが、ポスターが目につくところにあるというのは、見る人の興味に合致するイベントの存在を知ってもらうきっかけになる。

副委員長 ポスターを貼らせてくれる店舗を探したり、協賛金のお願いなどに走り回ってくれるサポーターを増やすことが必要になる。自ら汗をかいて郷の音ホールを応援してくれる人を増やすことが必要で、そのためには市も郷の音ホールの運営に一層熱意を見せなければならない。

委員 郷の音ホールの指定管理者もアイデアは持っていると思うので、できることの枠を広げるのも重要ではないか。例えば現在は、指定管理者が企画する事業を、市民センターで行いたいと思ってもできないが、こういったアイデアを実現できる体制に変えていくことも検討すべきだと思う。一方で、郷の音ホールは、プロ・アマに関係なく実演者の希望を叶えやすい、懐の広いホールだと感じている。ただし、実演者としての技術を持っていても、郷の音ホールまで希望を届けられていない人たちも市内には多くいると思われるので、それらを市やホールが把握できる仕組みが必要ではないか。

委員 これまでの委員会で提案された交流サロンのようなものか。

委員 広報誌などで、郷の音ホールが直接呼びかける方法でも良い。

委員長 傍聴者との対話は禁じられているので、この場の要望として述べるが、傍聴者の中に郷の音ホールの関係者がおられたら、これまでの委員の意見を活かす運営をお願いしたい。

委員 市民提案型はいい考えだと思う。もっと市民を巻き込んで、市民の持ち込み企画を郷の音ホールの「創造事業」に取り入れたイベントが実現できればと思う。

委員 生涯学習カレッジでは、秋の年間行事として、毎年郷の音ホールで合同鑑賞会を実施しており、何百人もの参加者が郷の音ホールを認知する機会になっている。文化芸術に取り組んでいても文化協会に所属していない市民もたくさんおられるので、これからは、そういう人たちが一緒になって参加するのが重要である。

副委員長 郷の音ホールがなかった時代から考えれば、成人式での利用など、その意義の大きさが感じられると思う。せっかく良い施設があるのだから、更に活性化する方法を考えていかなければならない。

委員 若者のたまり場として、何かできないか考える必要がある。

委員 そのためには若者発信の企画を取り上げる仕組みが必須となる。

委員長 県の文化懇話会のアンケート調査で、兵庫県の10年後の文化をどうするかというテーマについて、「青少年が“本物の文化芸術”に接する機会を設ける」という趣旨の表現があったが、ここでいう“本物”とは何を基準にして誰が判断するのか、という疑問に行き着く。この考えは、もう古いのではないか。我々は20～30代の若い世代にとっての芸術を、まだ認識できていない。市は、文化ビジョンには若い人たちの意見を取り入れられる姿勢で臨んで欲しい。

閉会（～12:05）